

入選 [MR誕生 100 周年記念論文コンクール『私が目指すMR』]

「ある桜の木から芽生えた私の MR としての使命感」

坂井清志（アストラゼネカ株式会社 オンコロジー・麻酔クリティカルケア事業本部
首都圏統括営業部 東京第四担当）

いつもの病院の光景が少し違って見える季節がある。それは春の桜が咲く季節。

私の担当病院の正面玄関横にそれほど大きくはないが凛としてたたずむ1本の桜の木が満開の花を咲かせる。春になると毎年決まってその前に人工呼吸器をつけてストレッチャーのまま桜を見る患者さんとその家族がささやかながらも花見をしている。そんな光景が連日続く、この光景は東京へ転勤した今でも自分がMRとして仕事をする上に忘れることのできない光景です。

以前私が担当していた施設はいわゆる地域のがんセンターでそこでがん専任MRとして約6年間担当をしていました。がんセンターに入院する患者さんの病状は様々です。早期発見ができ治療が見込める手術を受けるために入院する患者さん、再発して入院して抗がん剤治療を受ける患者さん、緩和病棟があればターミナルケアを受ける末期癌の患者さん。前述の花見をされている患者さんはおそらく末期がんの患者さんだったと思います。

当時私はまだMR3年目で初めて大きな病院を担当できる事が嬉しく、早く営業成績を上げて会社から評価されたいと思っていました。そんな私がその花見の光景を初めて目にした時痛烈にショックを心に受けた事を昨日の事のように思い出します。それは同時に私をとて不安な気持ちにさせました。「自分が営業している薬剤はこの病院のどれだけの患者さんに貢献できているのだろうか?」「本当に患者さんは自分がDrに紹介する抗がん剤を受けたいと考えているのだろうか?」「本来患者さんに必要のない抗がん治療を先生に無理に勧めてはいないか?」そんな疑問に自答しました。またそれと同時に生死がかかるような患者さんへ投与される薬剤を自分が医薬情報担当者として扱っている事実にかすかな恐怖感が一瞬自分の頭の中をよぎりました。

そんな時、会社が共催で乳がん患者さんのサバイバーシップを支援する会を私がお手伝いする事となりました。市内の各病院の乳がん患者会に声をかける事となり、会の趣旨や目的について私が各病院の乳がん患者会の代表の方へ説明にまわりました。打ち合わせを重ねるうちにある患者さんからこう聞かれました。「ところで坂井さんの会社ってどんな薬があるんですか?」私は自分が担当しているある薬を患者さんにお伝えしたところ、何とその患者さんが今まさに毎日服用されているとの事でした。聞けばその患者さんは8年前に手術し順調な経過をたどっていたにも関わらず2年前に骨への転移が新たに見つかって治療を受けているとの事でした。その患者さんは私にこう言葉を続けました「再発した時は最初腰が痛くて年のせいかなくらいにしか思っなくて・・・そこで通院した時に骨シンチを撮ってもらったら再発だって・・・その時は本当に恐ろしくなってどうやって家に帰ったかも覚えてなかったんです。でも今飲んでる薬を飲んでから痛みも無くなったし、画像上でもがんが小さくなって本当に主治医の先生とこの薬には感謝しているんですよ」その話を聞いた時私はうれしいというよりとてもみじめな気持ちを感じたのを覚え

ています。「自分の販売する薬を飲んで元気に生活をされている患者さんが自分の目の前にいるのに本当に十分な医薬情報を先生に届けているのだろうか?」「担当の先生から薬剤について真に相談される存在として認知されているのだろうか?」「患者さんのために貢献できると心から言えるだけの仕事を自分はしているのだろうか?」

そんな経験があったからこそ。それからの私は薬の売上よりも目の前にいる患者さんに貢献するという使命感で仕事ができただと思います。日本で権威と言われる先生から研修医の先生まで自社品の情報はもちろん最新学会での新たなトピックス等、自社品についての有益な情報も不利益になるような情報もスピーディーかつ正確にお伝えするよう心掛けました。自分が担当している病院で自社の薬を一番知っているのは自分なんだ、その自分がきっちりと医師をはじめとする医療関係者に伝えないと、その先にいる患者さんは十分なインフォームドコンセントが受ける事ができない。私たち MR が患者さんを救う事はできなくてもその手助けの一旦は担えるのではないか? そんな思いで今自分は MR の仕事を続けています。

最後に私の結婚式の際に頂いたその当時担当していた診療部長の先生からの祝辞を簡略に記載します・「坂井さん御結婚おめでとうございます。坂井さんは私たちのスタッフの一員です。これからも当院のチーム医療を支えるよう今以上の御活躍を御祈念いたします」この祝辞と担当交代の際に撮った当時の診療科スタッフ全員との集合写真は今でも私の宝物です。

1本の桜の木が気づかせてくれた私の MR としての原点。いつまでもその桜の花の色が色あせないようこの気持ちを大切にしていきたい。そう心から願っています。